

林直道先生インタビュー

河上肇没後70年を記念して河上会の長老に思いを語っていただきます。今回は、6月22日、林直道先生（大阪市立大学名誉教授）のお宅に、小嶋康生、広川禎秀、山本正志の世話人3人で伺ってお話をお聞きしました。林先生は93歳になられた現在も足許が少し不自由ですが、かくしゃくたるもの。毎日机に向かって筆をとっておられます。

第1話 河上肇先生の学問と思想



大内兵衛先生は、日本人にとって富士山が日本の山であるように、私にとって河上先生は日本第一の思想家である」とおっしゃっています。河上先生ほど学界及び一般国民に対

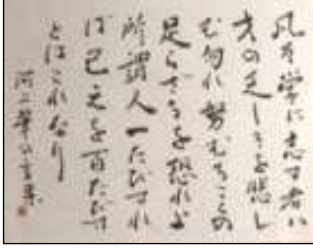
しても大きな影響を与えた思想家はいないと思います。それは河上先生が金力や権力には媚びないで、一身上の利害得失を度外視して、社会や人類のために尽くそうとした理想主義的・求道士的風格、虚偽を憎み常に自己の信念に忠実に生きようとされた、真摯な人生態度によるものだと思います。

河上先生が若い時から人生のモットーとされたのは、絶対的非利己主義」、他愛主義」と言われておりますが、これは若い時に足尾銅山鉍毒事件で人々がどんなに苦しんでいるかという話を聞いて、国元から送ってきた衣類を全部寄付したと言うことにも表れていると思います。

それからまた、26歳の時に、読売新聞に「社会主義評論」という文を書いて、とても評判になり、読売新聞の発行部数が一挙に4倍にもなった、と言われていますが、20歳代で既に思想界の第一線に躍り出たわけです。しかし急に筆を折って、宗教団体の無我苑に飛び込むという行動を取られました。29歳の時に、ようやく経済学者として身を立てるということが決まって、京都帝国大学の

法学部の講師になりました。そして短い期間に学位を取り、36歳にして教授になります。が、こんな風に京都大学で、若くしてどんどん栄達されたのは、河上先生がものすごく勉強をされたからだと思います。

河上先生については色んなことが言われておりますけれども、ものすごい勉強家であったということ。だいたい以前に河上肇記念会からこういう文章をいただきました。凡そ学に志す者は、才の乏しきを憂うる勿れ、努むることの足らざるを恐れよ。凡そ学に志す者は、知られざるをうらむなかれ。知らざるを憂えよ。願わくは初志を一貫して、天の負託に背くなかれ」と。とても



良い言葉ですね。

また、先生は経済学者としての活動を始められたが、先生にとつて経済学とは単なる世すぎの手段などではないし、文字通り「経世済民」、この世を正しく治め民を救うという学問

であり、特に民衆の幸せのための学問だったと思います。現在の社会の中で貧乏人が非常に多いということに着目して、先生

は貧乏を退治するという問題に取り組みました。先生が貧乏問題に取り組まれた最大の成果は、1916年、大阪朝日新聞に連載されて、1917年に一書にまとめられた『貧乏物語』でした。この書は大内兵衛先生が、日本人の書いた最初の経済学の書物」とおっしゃっています。が、その中でマルサスの人口法則などに対しても的確な批判をされておりました。いろんな形での貧乏礼賛論、金持ちの方が時間を持て余して困るのではないか、それよりも一生懸命働く貧乏の方がいいのだ」といった議論に対しても的確に批判しておられます。

何よりも先生の文章が非常に魅力的で、この書物は多くの人に読まれました。大内先生は、岩波文庫に『貧乏物語』を入れるにあたって、この『貧乏物語』が大正5年大阪朝日に載せられて、数十万の読者の絶賛を博した。今日初老を過ぎたインテリにして、このことを記憶しない者はないであ

ろう。そして彼らの時代、いわゆる社会問題について多少の見識を有すると自負するほどの者であれば、必ずやこの書によって開眼させられたことを告白するであろう。ことほど左様に時代の主張に応えた本書の衝撃は大きかったのである」とおっしゃっています。

しかしこの書物にはひとつの欠陥がありました。それは、先生の持つておられた経済学の知識が、マルクス以前のブルジョア経済学であつて、そこからは正しい貧乏の原因の分析もできないし、またそれに対する正しい対策も出てこないのでした。

この本は上中下巻に分かれています。上巻の方はとても活気に満ちていて、我々にとつて今でも参考になります。中巻はこの貧乏の原因がどこにあるかですが、それは生産の非常に大きな部分が贅沢品の生産に向けられて、大衆の生活に必要な生活物資の生産が少ないことにあるというような、正しくないことをおっしゃつておられる。したがつてどうすれば貧乏が解決できるのかと言え、要するに金持ちに贅沢を減らしてもらう

ことだ、ということになるわけです。これは正しい考えではありません。

ですから『貧乏物語』は貧乏という問題に着目をされて、貧乏を根治することを自分の生涯の目的として生きながらえている本書の著者は」と書かれているように、先生が貧乏という問題を大きくクローズアップされて、経済学の中心問題とされた点は、画期的なものであったけれども、結論のところでは正しい議論にはなっていないかつた。

それから世の中がどんどんと変わつてまいりまして、1917年にロシア革命が起こり、さらに第一次大戦直後には、日本で44府県の100万人を超える人々が参加した「ヨメ騒動」といった大事件が起きます。農民の小作争議や労働者のストライキがどんどん発生するという状況の中で、先生は自分の持つていた経済学がブルジョア経済学であり、これでは役に立たないということに気がついたのでしょう。そうすると先生は、まだまだ売っていた『貧乏物語』を潔く絶版にされました。

これは普通の人にはなかなかできないことでした。そして「或医者の独語」(全集10巻)という論文で、自分は今まで内科的治療でやろうとしていたけれども、大きな寄生虫が体内にいる場合にはどうしても外科的な手術が必要である。心の改造よりも物的な改造・社会的な改造が必要だ」と書かれて、大きく時勢に敏感に対応して、思想変化を遂げられつつありました。

その思想変化がほんの緒についたばかりであった時に、マルクスの『賃労働と資本』とか、そういういった初歩的な著作を翻訳されていますし、福田徳三氏が『賃本論』を批判したことに対して、『賃本論』を擁護して、論争をなさっています。

これは福田氏が論争の根拠としたものが、外国文献の無断借用であったことが明らかになったこともあって、この論争は衆目の見るところ河上先生の勝ちだと見られました。そうしたことからも河上先生はブルジョア経済学も含めて、その時代の日本第一の経済学者と見られていたと言えるだろうと思います。

1923年、先生は年来の研究をまとめて、ラ

イフワークのつもりで『資本主義経済学史的発展』という大きな書物をお書きになりました。この本は非常に評判をとりまして、26刷まで出たという高い評価を得た本なのですが、それが櫛田民蔵氏によってボロクソに批判をされまして、先生は大ショックを受けられるわけです。しかしそういう時にこそ、本物の学者とそうでないものの違いが出てくると思います。

先生は善意にかける誤解も所々にはあるけれども、それらは枝葉末節のことで、指摘された点は基本的に当たっている。自分のマルクス主義認識が非常に浅かった。一からやり直そう」と決心され、静養のため新和歌浦の望海楼に行かれます。

この旅館は、天皇が泊まるくらいのごく高級な旅館です。ここで1ヵ月、先生は精神を統一するために、考え続けられるわけです。戦後、国鉄労働組合や動力車労働組合の南近畿地方本部が、毎年この近くの旅館で労働学校をやっています。私はそこに常連の講師として行っていました。

河上先生が「旅の塵 はらひもあへぬ我ながらまた新たな旅に立つかな」と詠まれ、また新たな

な勉強をしようと決心された旅館であったな、ということを『河上肇記念会会報』91号2008年7月)に書かせて頂いたことがあります。

それから河上先生のものすごい努力が始まるわけです。これは堀江邑一さんが河上肇著作集3巻「解説」に書いておられることです。が、その時の勉強は大変なものであったということです。哲学的基礎から史的唯物論、そして資本論と徹底的に研究して4年間これに打ち込まれたのでした。

ついに先生の経済学の講義は、『資本論』に限りなく同じになってゆきました。これでは資本論と同じではないか」と批評されたのに対して、先生は、真理は一つであるから似たものになるのは当然のことである」と言い返しておられます。この『経済学大綱』の文章はとてもいいですね。これは改造社の『経済学全集』の第1巻ですが、第1巻というのは、その時代の最も人気のある、影響力のある学者が書くというのが常識です。河上先生はその中でこう言われています。顧みれば、私のマルクス説への完全なる推移は、軽蔑に

値するほどの多年に亘る躊躇と折衷的態度との後に、わずかに実現されえたものである。だが思索研究の久しきを経て漸くここに到達しえたる代りには、私は今たとい火にあぶられるとも、その学的所信を曲げがたく感じてゐる。これは多年にわたる努力の結果としての先生の思想変化の結論であり、最初は、絶対的利他主義 非利己主義の志はあったとしても、理論内容としてブルジョア経済学のお粗末なものであったが、遂にここに至って経済学の真理の頂点に到達されたという先生の半世紀を締めくくるような文章であろうと思います。

それから河上先生は、『第二貧乏物語』をお書きになりますが、この本は全編を貫く社会的正義感とマルクス主義の真理性の主張という点で、ものすごく多くの人に影響を与えた本です。私たちの学生時代には、先輩から「まずこの本を読め」と言われました。私は天折した叔母の書棚の中からこの本を見つけて2日間ぶつ通しで読み通して大感動し、世の中の姿ががらりと一変したような感じを受けました。予科1年の時のことですが、

私の人生にとりまして『第二貧乏物語』を読んだことが大きなショックであり、これが現代社会の仕組みなのか、そして、こういうふうに生きなければいけないと決心したことを覚えています。

それから河上先生は、いよいよ先生の影響力が広がるにつれて、京都大学をクビにされることになっても、先生は、教授会の多数が自分の辞職に賛成するのであれば、潔くそれを受ける」と言っていて、大学の自治ということを尊重しつつ、潔く京大をお辞めになりました。その時には、荷をおろし峠の茶屋に「ひばりきく」櫛田にあてた手紙」と、一休みをして資本論の翻訳でもやるか、というような気持ちでおられたわけです。

けれども 1929年3月に山本宣治が虐殺されました。山本宣治は生物学者であり、しかも彼の家は何不自由のない大きな観光旅館であり、何も困ることのない身分にあった。にも関わらず、義理も何もないのに、彼が階級闘争の第一線に立って国会でただ一人、治安維持法の改悪に反対して、神田の旅館で暗殺されるわけです。河上先生はとても大きなショックを受けまして、経済学

を専攻する私が山本宣治に劣るような行動は取れない」と言って、いよいよ第一線に出て、地下に潜って活動をされ、そのために先生は逮捕されまして、4年半の監獄生活を送られるわけです。

野呂栄太郎とか小林多喜二のような、拷問によって殺されても、それでも口を割らなかった鍛えられた闘士もいましたが、河上先生はそこまでは頑張れなくて、自分は第一線から引退する。そして書齋に戻って社会の実践運動とは一切関係しない」ということを発表されたわけです。これが正しい態度であったとはいえないことは明らかですが、やはり先生の態度は立派であったと思います。といいますのは、先生は、これによって思想的に転向したということは全くおっしゃってはおられない。どこまでもマルクスの学説は正しい」河上肇という一人のじいさんが没落するのであって、自分は人間を廃業するのだ」ですから河上先生が「廃人宣言」をしたと言われていると思います。これはこれで立派な態度であったと思います。

刑期の三分の一をすぎた時に、当局は河上先生

に対して、この「廃人宣言」よりももう一歩何か進んだことを書いてもらえれば、刑期を半分にして出してもらうことが出来ると誘惑しました。河上先生はやはり早く出たいものですから、心が動くわけです。河上先生は、没落をしたのは自分一人であって、マルクスの思想は燦然と輝いている」という態度を貫いていたのです。けれども、科学校だけではなくて、宗教も人生にとって大切なことである」とかなんとかそんなことを言って、しかも運動に悪い影響の出ないようなことなら書けるはずだ、と河上先生は獄中で知恵をこらすわけです。

それをやっと止めたのは秀夫人でした。秀さんという人は、河上先生があれだけの莫大な印税収入がありながら、ほとんど全て共産党にカンパをされて、私生活は非常に慎ましいものであったといわれています。秀さんのタンスの中には、古い着物しか残っていなかった。新しい着物などは全く持っていないかったと言われておりました。

その秀夫人が、私はあなたに今まで口答えしたことはありませんが、今度ばかりはあなたのお

考えに賛成することはできません。まるまるお勤めになっても、あともう三年足らずの御辛抱です。お辛いことは重々お察し致しますが、無理をしてお出になると、折角早く出ていらしても、あとできつと後悔なさるに決っています。無事に勤め上げてお出になりましたのなら、今度こそ、そりやもう一生の重荷を卸したいというお気持ちで、気楽に余生を楽しんでいただきたい。私はそればかり祈ってるんです」と言いました。

これをきいて河上先生は、何を言うか、わしだつてそれなりに苦労した人間だ。だからマルクス主義に傷をつけないようにしながら、上手く文章を書くことが出来る」と言ったのですが、秀夫人は絶対にそれは駄目だといつて認めないわけです。こうして夫婦で言い合いをしているうちに河上先生の腹はきまり、恩赦などに預かりたいなどというケチな考えはやめよう。最後まで刑期を全うするということを書いているわけです。このあたりのもとも非常に大きな感動を呼ぶところだと思えます。そこで河上先生は最後まで刑期を全うして出獄されたわけです。

河上先生の高弟である福井孝治先生は大阪市立大学の学長をされ、大阪経済大学の学長もされた方です。河上先生は、ほとんど誰も手にしない『資本論』のカウツキー版をよく読まれていたのですが、このカウツキー版資本論というのは、フランス語版資本論をかなり採り入れたものです。このフランス語版資本論は、マルクス主義の世界ではあまり読まれていませんでした。福井先生は河上先生からこのカウツキー版をもらって大切にされていました。

大阪市立大学の経済の教員の学習会で、いろいろな議論が沸騰しまして、福井先生に、先生最後にご意見をお願いします」と言いましたら、福井先生がはじめて聞くような意見をお話になりました。皆ビックリしたのですが、福井先生はフランス語版資本論にもとづいておられたのです。

フランス語版資本論というのは、ジュゼフ・ロアに依頼したフランス訳の出来がどうもよくないので、マルクスが一から自分で訳し直したものです。その上にマルクスは、フランスの読者に判るようにと説明をおぎなったり、表現をわかりや

すく変えたりしたので、世に普及しているドイツ語版の資本論とくらべて叙述が変わっている個所がずい分多いのです。

私は自分のことを河上先生の孫弟子だと自負しておりましたから、どうしてもこのフランス語版資本論を読んで、学びたいと念願していました。幸いフランス語版資本論刊行百年記念ぎりぎりの年に、『フランス語版資本論の研究』大月書店（1975年）という本を出すことが出来まして、ようやく学恩の一端に答えることが出来たと思っています。私のゼミ教官であった福井先生のお墓にそれを捧げに行きました。

河上先生は非常によく勉強をしておられ、フランス語版資本論そのものではないと思いますが、カウツキー版資本論を通じて、フランス語版資本論にかなり通じておられたのではなからうかと思えます。フランス語版資本論は神戸大学にもなくて、京大と東大と大阪市立大学ぐらいしか入っていないかっただと思います。大阪市立大学の本は福井先生が終生借り出しておられて離されませんでした。幸いにしてその復刻版が出版されて、

読むことができたのです。

私はドイツ語出身でしたから、フランス語はあまり得意ではありませんでした。そこできなり無理をしまして、家庭教師に来てもらったりして、フランス語を習得するにはシャンソンをやった方がいい」と言われまして、シャンソンを21曲暗記いたしました。そうしたら思わぬ収穫もありました。例えば サントワ・マミー」というシャンソンがありますが、あれは日本では、捨てられた女性が去りゆく男性に対して、恋々の思いを述べることになっています。越路吹雪の歌でもそうなんですが、実物は違います。捨てられた男性が、去りゆく女性に対して恋々たる思いを語りかけたものなのです。もしも女性が男性に語りかけるのであれば、サントワ・モナミ」となるはずです。そんなことも副産物として知ることができました。

河上先生は私にとっては、かけがえのない思想家だと思つて暮らしてまいりました。秀さんがお亡くなりになりました時に、末川博先生と大塚有章さんという、秀夫人の弟で、末川先生の奥さん

の兄に当たる人ですが、その二人とカメラマンと立野正一さんという喫茶フランソワの経営者ですが、この人たちと一緒に京大正門の南側にあった河上先生の家に遺品の整理に行つたことがあります。あの大先生にして、贅沢な家財道具は何もありませんでした。本と机があるだけでした。『第二貧乏物語』の材料になった切り抜きとか色んな物がありました。それから柱には、辞世の人生66年 多少の波瀾、流れに棹さして……」と言つた習作がいくつか貼つてありました。この日のことは私の若い時の忘れられない思い出となりました。河上先生の借家を買ひ取つて、河上会館を建ててはどうかといった意見もありましたが、家主が凄く高い事を言いましたので、それは無理だということで河上会館は実現しませんでした。

第2話 大阪商科大学事件と河上肇先生

次に大阪商科大学事件が1943(昭和18)年に起きました。わが国の大規模な学生運動としては、浅沼稻次郎氏などが大活躍をした1923年

の早稲田の軍事研究反対事件があります。それから1933年の京大滝川事件は、当時、内務省が滝川教授の著書『刑法読本』と『刑法講義』を発売禁止処分とし、文部省が同年5月26日、滝川教授の休職処分を強行すると、法学部教授たちが辞表を叩き付けて反対したのをきっかけにおきた闘いでした。これは学生の間でも長い間、多くの犠牲を出しながら、学生・教員両方を含めた大きな闘いとなった事件です。そして終戦間近に起きた、大阪商科大学事件ですが、これは、戦争に反対してマルクス主義の研究会を大規模にやり、出席点検制度反対」をストライキでやり抜いた事件ですが、この大阪商科大学事件が河上先生と非常に深い関わりがあるのです。

狭い意味での関わりと、広い意味での関わりがありまして、広い方の関わりから申しますと、なぜ大阪市立商科大学で戦争の終わる頃にあれほど多くの学生たちがマルクス主義の研究をやっていたかという事ですが、それは京大事件の影響が大きいと思います。当時、河田嗣郎学長でしたが、京大経済学部教授会で、河上先生の辞職を容

認する採決をとる時に、多数決で決まってしまうことが分かっていましたから、河田教授は、欠席することによって反対の意思を表明されたと言われています。

この河田学長のことはよく言われることはあまりないようですが、それは時代の勢いでやむなくそういうふうな姿勢になられた点もあるわけで、初期の河田学長の功績は非常に大きいと思います。

河田学長がまず第1にやられたことは、恒藤恭、末川博、佐々木惣一といった3人を大阪商科大学に招き入れたことです。恒藤先生と末川先生は専任講師でした。それも文部省が横槍を入れて、教授にすることはまかりならん」と言った。それで7年間過ぎた1940（昭和15）年にやっと教授になられた訳です。佐々木惣一先生はすぐあとで立命館の学長になりました。大阪商科大学にこの3人の先生方が来られたので、学内の雰囲気はがらりと変わりました。日本を代表する法哲学の最高権威といわれた恒藤先生、民法の最大の泰斗である末川先生、こんな先生方が来られたという

ことで、私達の時代には教授になられたお二人の先生方の名声がとても大きかったものですから、みんな大阪商科大学というのは素晴らしい大学になったと思われていました。

第2番目には、配属将校が教授会に出席することを拒否したことです。大阪商科大学は公立でしたから教授会の権限が強くて、文部省の意見が通りませんでした。最後まで大阪商科大学の教授会には配属将校は入らなかったということです。いろんな大学で配属将校が教授会に入ることとはとても大きなならみになりまして、自由な討論ができないという状態でした。

第3番目には、河田学長は講座制を廃止されました。講座制がありますと、その教授の意向に沿った学説にしないと昇進させてもらえないという大学も多かったわけですが、河田先生は講座制を廃止して、学科目制にすると言いまして、教員が皆、主任教授の意向に関係なしに自由に研究を深めることができるようになり、上林貞治郎、安倍隆一、宮上一男、吉田正三、岡本博之、といった若手の講師・助手が急成長することになりました。

した。

第4に河田学長がやったことは、河上先生のお弟子さんで全国で肩身の狭い思いをしている教員を引っこ抜いたことです。経済学では、福井孝治、堀経夫、名和統一など河上肇の弟子がおり、そういったことで学内全体に非常に自由な雰囲気がありました。さすがに教室の中ではマルクスの名はあげませんでしたが、福井先生などもゴットルとまぜこぜにして言うわけですから、学生は福井先生の講義はグルクスやと評していました。が、学生はよく知っていました。そういうことで講義でも資本論を土台にしてやっておられるところも沢山ありました。

しかし学生の自由な研究はできませんでしたから、ゼミナールがいろんな情報源になっていた。ゼミナールでは先生も思う通りのことを言うわけです。図書館でもそういった関係の本のカードは抜いてあり、本は別室に分置されていたから、図書館から借り出すことはできませんでした。

私が予科に入ったのは1939 昭和14)年で

したが、その前の昭和12年に岩波文庫をはじめ新本は発売禁止になっていました。昭和13年には全国の本屋が一斉にガサ入れされて、膨大なマルクスに関係する本が没収されました。私の一年上の学生は古本屋で本を買っていましたが、たった1年のちがいで私たちはマルクスの本が買えず、残念至極でした。運動部の学生が兵隊に行く時に後輩に対してこれを読めと言って、本を譲り渡していくわけですけれども、私たちにはそういった運動部の先輩はいませんでしたので、片っ端から本を書き写しました。山田盛太郎の『資本主義分析』とか、何冊かを書き写しました。私たちは予科の机の前の方に弁当箱などを積み上げて教壇からは見えないようにしてやっていました。当時、末川先生が予科の主事になりました。私達予科の学生が一番困ったことは、商業数学という古い商業学校時代の名残のような科目がありました。商品の計算などをするわけです。それが嫌で嫌で欠席し、それで留年する学生が沢山出た訳です。私たちは末川先生の所にお願ひに行きましたら、私の責任で商業数学の成績で留

年することだけはないようにする」ということにして頂きました。

学生たちの多くは河上先生のことはよく知っていました。河上先生というすごい先生がおられて、今はどのように過ごしておられるか知りませんけれども、まず第一に読むのは『第二貧乏物語』だということになっていました。なぜ大阪商科大学があれば反戦ムードが高まっていたかと言いますと、それは河上先生の学説の恩恵だったと思います。具体的には河田学長の4つの改革の成果が非常に大きかったと言えると思います。

次にもっと直接に河上先生の影響を受けた事件がありました。1942 昭和17年に出席点検制度反対」を掲げてストライキを含む大きな闘いが勃発しました。憲兵がひたてにくるぞという恐怖心の下で、恐る恐る起った闘いでしたが、学生の勝利に終わったのです。

それまでは自由聴講制度だったのが、なぜ出席点検制度を導入するようになったかと言いますと、教授の中には「大東亜戦争は聖戦だ」と言う右翼の先生もかなりいて、授業ではまず起立、東

方の天皇陛下に向かつてお辞儀をしてから授業を始めるような先生がおりました。だんだんみんなアホらしくなって、そんな教授の授業はボイコットしていました。そういった先生が、こんなことが外部に知れたらどうなるか。無理強いしてでも出席をさせて、それでも出席しない学生は単位をやらなく」と言う。20歳を過ぎても学生は徴兵を猶予される制度がありましたけれども、単位不足で兵隊にとられるぞ」と言つて脅かします。そうすれば授業に出てくるだろうと言いだしたようです。

当時、堀経夫先生が学生部長をされていました。堀先生が、大学人というのは20歳を過ぎている学生も多く、もはや社会人だ。だからみんな紳士である。ジェントルマンの付き合いをしなければならぬ。だから自由な講義の選択が原則である」と言つておられるのを聞きまして、みんな堀先生の所に行ったわけです。

この闘いの主力になったのは学部2年生でした。私は学部1年生でしたのでよく分かりませんでしたし、あまり運動に乗り気ではありませんで

した。その2年生のリーダーが羽岡栄之助といまして、気の毒にも少しあとで盲腸で急死した学生ですが、この人はすごい人物でした。このリーダーが秘密の研究会の8人を引き連れて、学生有志という形で堀先生の所に面会を申し入れたわけです。私もオブザーバーについてこいということとで引っ張って行かれました。

そうすると堀先生と羽岡君が意気投合しております。大体こうした出席を強制するということは大学の主旨にもとる」と言いまして、終わりに、それでは堀先生がそのようにおっしゃっているということを聞いたら、みんな学生が安心するということで、明日の講義の時に先生の口から学生に対して、自分は出席強制には疑問を持っているのでできるならそうならないように努力したい」という趣旨の発言をしてくださいとお願いをしましたところ、堀先生はそれならいいですよ、と言われました。堀先生も世間知らずでしたから、学生部長が教授会の意見を飛び越えてそういうことを言えばどうなるかということは、先生には考えられなかったわけです。

河上先生の『宵叙伝』の中では、みんな先生の所にお見舞いの饅頭や甘い物を持っていったらしい。河上先生は甘いものが好きでしたから。でも堀先生は特高警察を恐れて饅頭を持っていきませんでしたから、『宵叙伝』の中では堀先生は悪く言われています。『宵叙伝』というのは、先生の好き嫌いがかなりはつきりと出ています。

僕らへの対応では堀先生はとても立派だったと思います。堀先生は民主主義者でした。そして大教室で授業の後に堀先生はそのことをお話になりました。講義の終わった教室はガヤガヤしていたのでよくその話が聞こえなかっただろうから、私が教壇に登って、皆さん、聞いて下さい。今堀先生がこういうことを言われました。この事を皆で確認しましょう」と言うのが私の役割でした。けれども私にはとてもできないと前の晩から悩みました。教室ではみんなの顔はとも見られませんでしたから、教室の後の壁に向かって大きな声で、皆さん、聞いてください。堀先生は今こういうことを言われました」といって、みんなに伝えて確認を取りました。そうすると堀先生は教

授たちの集まりで、学生部長でありながらなんという軽率なことをやったのか」と吊し上げにあつたわけです。そういうこともあって堀先生は出張ということで東北大学に追いやられました。

私は大学に呼びつけられて、堀先生はそんなことは言っていない。デマを飛ばすなら退学にする」と言われましたけれども、周りの学生たちは、それは違う。俺も聞いた。証人になってもいい」と学生部に受けのいい学生たちまでが言いに行きましたから、これでは手に負えないということで、大学当局は実質的には骨抜き案の後退しました。学生集会室に午前中名簿を貼っておいて、それに午前中に判子を押せば、その日の登録している授業は全て出席と見做す、ということになりました。

私たちにとってはどうせ卒業したらすぐに兵隊にとられる。それまでの間に少しでも自由な時間に本を読んでおきたい、というのが一番の願いでした。その貴重な時間が、あんなつまらない右翼の教授への強制出席でつぶされるのを免れた。これは大きな成果だということでもみんな意気が

上がっていました。

その直後に河田学長が亡くなりました。そして上野芝の学長の邸の前に全学の学生がずらっと整列をしていましたけれども、そこに今日は河上肇が来るぞ」と言った情報が伝わってきたわけです。そうすると我々の並んでいる前を杖をついたおじいさんが通り過ぎたわけです。生きて歩いている河上先生を見たということで、学生が皆大きく感動をして、学生の隊列が声なくして揺れた」と、『大阪市立大学百年史』全学編（土）205ページに書かれています。この写真（左）が学長のお葬式の時に来られた河上先生の写真です。沖本彰さんから頂きました。



中央が河上肇 右は金子正道（元教員 若い頃からの親しい友人） 左は岡本一郎（元和歌山高商校長）

たとえ逮捕されても、マルクス主義を捨てるとは言わなかった河上先生、真理に忠実であるという姿勢を貫いた河上先生の姿勢を我々の人生の方針にしよう、ということまで皆意気が上がりました。出席点検制度の闘いに勝利をした時でしたから、それから反戦の闘いとマルクス主義の研究會をおおいに増やそうということになりました。研究會は最大3人で、それ以上になりますと目立ちますから、毎週集まる家も変えて、それらを合わせますと、100人を超える学生たちが、反戦の立場からのマルクスの研究會に参加するという大きな成果を上げたわけです。

これが、我々の大阪商科大学事件が河上先生と繋がっているという理由です。河上先生の姿を見たことによって、皆感動をしましたが、本当の思想家というのはそういうものだと思います。先生は一言も発せられたわけではありません。黙ってゆつくりと歩かれた姿をちらと見ただけでしたが、それでも学生たちがあれほど感動したのです。そういうことで、私達は河上先生の講義は聞いたことはありませんでしたけれども、私達

は河上先生の孫弟子だと自分たちでは思っています。

戦争が終わった時に、河上先生は寒さと栄養失調で、福井先生によりますと、水鼻垂らしてお気の毒で、やつれた野良犬のようなお姿であったとおっしゃっておられました。

戦時中は、特高の監視下で自由な発言はできませんでしたが、先生の「言うべくんば真実を語るべし 言うを得ざれば黙するにしかず」といったりつばな詩もあります。曠古の大戦 世は狂へるがごと わがいほは ひるなほしずか人はかかる境を哀めど われ敢て黎明の近きを疑はず 心は風なき春のあけぼの 太古の湖の静けさに似たり」(1944年1月5日)。私はよく本のサインセールなどで河上先生のこの言葉を入れることにしています。

終戦後の10月15日、共産党の中央を代表して黒木重徳という人が先生に会いに来て、河上先生に19日の大阪中の島公会堂で開かれる 自由戦士出獄歓迎人民大会」へ出席をすすめます。

約三十分対談。余は終始弱い態度しか取り得ざ

りしものにて、諸君に対し面目なしと語りしに、さに非ず、過去の閱歴、年齢、体質等より考へて先生はそのベストを尽されしものとして一同は感謝し居れりとのことに、余いたく感激す。」と『晩年の日記』に書いておられます。

日記の中では、大阪商科大学事件に関係した山本広次君という人がおりまして、彼のお父さんは建築家で大阪拘留所を作った方ですが、お父さんが作った拘留所に息子が入れられたということをお母さんがこぼしておられました。彼が豊中から河上先生のお宅にお伺いして、秘書ということで自叙伝の清書に通っておりました。

先生は最後に「病床雑詠」で野坂参三が中国から帰ってきた時に、遺憾なり 半生の間鍛え来し つるぎ抜き得ず 力しなへて」(1945年10月27日)の言葉を残していますが、

同志野坂を迎へて」の詩で、

同志野坂新たに帰る

正にこれ百万の援兵

我軍これより 更に大に振ふべし

刑余老残の衰翁

竜鐘として垂死の床に危坐し

涙を浮べ声を揚げて喜ぶ

われもし十年若かりせば

菲才われもまた 筆を提げ身を挺して

同志諸君の驥尾に附し

澎湃たる人民革命の

滔天の波を攀ちて

共に風雲を叱咤せんに

身は是れ葉末における露

落ちなむとして幸いに未だ落ちず

けふのよき日に逢ふを得たれども

病臥すでに久しきにわたりて

体力ことごとく消え去り

氣力衰へてまた煙の如し

遺憾なるかな

同志野坂 国を去りてより十有六年

万里を踏破して 再び帰り来たるの日

空しく病床に臥して

思ひを天下の同志に馳せ

切にその奮起を祈りてやまず

というのが先生の最後のいわば遺言であつた
だろうと思います。

戦後70年を迎えて

最後に、戦後70年を迎えての私の思いですが、
日本は戦後長い間、高度成長が続きましたから、
貧乏なんていうのはよっぽど運の悪い人間が墮
ちるだけであつて、今では貧乏なんていうのはほ
とんど例外的な現象である、一億総中流階級に
なったというような事まで言われておりました。
けれども、それが1990年のバブルの崩壊以来、
状況が一変いたしました、それから小泉内閣の時
に派遣労働を一気に全ての産業に一般化すると
か、いろいろなことがあります、生活が苦しくな
っていきます。

特に2008年のリーマン・ショックが21世紀
最初の大恐慌であつたと思いますが、日本は数年
間デフレの不況が続きます。その時には派遣労
働が労働者全体の1/3にも達するという状況

の中で、貧乏という言葉は使いませんけれども、格差と貧困」ということが現実の問題になっているわけです。

その時に河上先生が、貧乏の絶滅を一生の課題として念願するということをおっしゃっていった、そのことを踏まえても頑張らなければいけないと思います。

第二次安倍内閣というのは、株の値を無理して吊り上げて、経済がとても順調に行っているような外観を作り出しています。そのためには年金基金を株式に注ぎ込んで、というような無茶なことまでやって、年金基金に大損害を与えても、株価だけを吊り上げて一応外観をとりつくろっています。今度の選挙にしても、世論調査でも、まだ38%が安倍内閣を支持するといった状況です。

けれども安倍首相の考えていることは、経済が上手くいっているのだから俺に任せておけば生活がうまくいくぞ、ということとで経済で国民の人気を得ておいて、第一党になる。そうしておいて単なる閣議決定だけでもって集団的自衛権の行使を容認するとか、なし崩しに憲法を変えてい

くということをやって、立憲主義を踏みにじったようなやり方をやっているわけです。

今度はいくば憲法の改定をうちだそうと思っていきたいのですが、今はできれば非常事態条項という戒厳令とも言えるものだけを、とにかく国会では通したいというような狙いです。秘密保護法をはじめとして、そういう自由を奪っていく、そして事実上の治安維持法的な体制を固めていく、そして憲法を改定するというのが彼の狙いです。

この憲法は外国から押し付けられた憲法だ」と言うことを安倍総理も言っています。これは全く事実反することです。彼の尊敬する岸信介が、やっぱり憲法は押し付けられたものであるから、憲法を改訂したい、ということとで公聴会を組織して、憲法はアメリカの押し付けだ」ということを論証しようとしたしました。ところが、これが藪蛇になりました。と言うのは、この憲法第9条に相当する内容を最初に言い出したのは、当時の総理大臣の幣原喜重郎です。彼がそのことをマッカーサーに申し出たところ、マッカーサーが

びつくり仰天して驚いた。そしてそれは実に素晴らしい提案だ、私も賛成すると言ってマッカーサーが手紙を書いているのです。

こうした歴史の証拠が岸信介の設置した公聴会に出されてた。ですから、岸は「憲法はアメリカの押し付けだ」ということを言おうとして、公聴会では逆のことが明らかにあって藪蛇になったわけです。これで岸は大きな打撃を受けたわけです。このことがまだ一般に知れわたっていないということで、今だに憲法はアメリカの押し付けだと言った議論がまかり通っているわけです。

こうした事がもつともつと広く一般化されていけば、憲法9条を変えることに反対の世論がより一層力を増すであろうと思われます。安倍内閣は国民の9条支持の力を見損なっています。おそらく戦争体験をした人だけを世論調査すれば、かなりの多数で憲法は変えてはいけない、と言う結果になるだろうと思われます。若い人はまだ戦争体験を持っておりませんが、何を考えているのかよく分かりませんが、一部の人達は徴兵制になるのではないかということを心配し始めていま

す。

それとともにアベノミクスが崩壊しつつあるということが明らかになってきています。アベノミクスというのは見かけだけの株の吊り上げと、底なしの日銀券の発行による国債の購入ですが、もはや日銀のその政策が危うくなってきた、ついにマイナス金利を実施するまでになっています。

最近も、お札の増刷は異常であり、このままでは破綻だということを、アメリカの投資家のジム・ロジャースという人が、朝日新聞で言っています。アメリカの世論を見ておりましても、今のままではアベノミクスというのは行き詰まりになるのではないかと、言われています。

そういうことでありますから、我々は自信を持って憲法を守れ、平和と自由を守れといったその闘いに、運動に、邁進すべきだろうと思います。それが私の感想です。それがまた同志諸君の奮起を祈りてやまず」と言った河上先生の遺言に沿う道ではないかと思えます。

以上です。